

May, 1935.

115

**licum. Supplementum Tertium 1917—1933 (Oct. 1934).**

羊齒類分類學の權威者であるデンマークのコペンハーゲンの CARL CHRISTENSEN 氏が不朽の名著 *Index Filicum* の第三増補。今回の増補は 1917年より 1933年に至る 17年間に亙る全世界の業績に對するもので全巻 219頁序文に次で分類表があり、次はアルファベット順に屬名種名を並べた本文でこれに 185頁を費し、最後の 19頁は文献集にあてられてゐる。分類表は既刊二冊の増補には見なかつたもので大變便利である。又今日では幾多の屬に細分しなくてはならぬと一般に考へられてゐる *Dryopteris* フシダ屬や *Polypodium* ウラボシ屬を今までの廣義のまゝに残してあるのも時宜に的した處置である。かゝる性質の書でこれらの屬を細分すれば學名を機械的に變更しなければならぬ種類が澤山にできて不用の異名が増さざるを得ないからである。分類表の最後にある屬及び種の總計を見ると著者は 1934 年 1月に於て 12科 213屬 9387種(このうち 3屬 6種は分類上の位置不明)を認めてゐる、澤山の學名變更があり、又今日まで日本特産と考へられてゐた種類で(例ばクロガネシダ、オホヒメワラビモドキ、ウラボシノコギリシダ等)すでに古く支那で發見記載せられた種と同種にせられたものもあるが、繁雜をさけてこゝにはこれらを列挙しない。羊齒類の分類を研究するものには 1933年までの全世界の業績を知ることができて著者から受ける恩恵はたいしたものである。なほ *Lycopodium*, *Selaginella*, *Equisetum* 等の所謂 *Fern allies* の *Index* をも完成せられんことを切望する次第である。

(田川基二)

**牧野富太郎、清水藤太郎両氏：—— 植物學名辭典**

本書はその書名の示す如く植物の學名つまり屬名と種名との解説を目的とする辭典であるが他面植物記載用語の羅和對譯の辭典としても役立つものでむしろこの目的に最も活用せられるかもしれぬ。四六判三百餘頁、全編を八項に分ち、第一の凡例に於ては屬名及び種名に必要なラテン文法の一斑を示し、第二のラテン語の發音に於てはローマ法、英語式、獨語式の三發音法に分ちその差を表で示してある。第三の野生植物分類表には分類學上使用せられる階級即ち界より個品に至る二十一階級を示し第四の植物自然分類一覽はエングラウ式による管束植物の科までの分類表である次の第五は屬名表で日本植物を主とした屬名を一々分解し語原を示し意味を明にしてある。第六は難解地名表で古書に出てくる地名で今日の何處のことかわからぬやうなものはこの頃を見れば解決するわけである。第七は種名表で本書の大半を占め、かなり多數の圖も挿入されてゐる、解説は要領を得て居るが簡單である、この頃は又

植物の記載に使用せられる術語の羅和辭典をかねるわけであるが解説が簡單であるから初學者には眞意をつかみ得ぬものもあるであらう。第七は著者名表で學名をつけた學者の名前とその略名とを對照したもので國籍と死亡した年を並記してあるのも便利である、近年活動をはじめた支那の學者が全部はぶかれてゐるのは淋い感がある、最後の第八は常用略語表でこの頃の最後に諸種の記號がまとめてある。學名の構成法や命名規約の要領などがはぶかれてゐるのは残念であるが、四十數年前に出版せられた大久保、齊田、染谷三氏共編の植物學字彙以來みるべき辭典の一冊もなかつた日本に今日この書を得たことは喜ばしいことである。植物の研究者は是非座右に一本を備るべき良書である。(春陽堂發行、貳圓五拾錢) (田川基二)

**野口彰氏**：——**臺灣産蘚類考察 2.** (A. NOGUCHI:——Contribution to the Moss Flora of Formosa. 2. in Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, XXIV, 135, p. 469-473, Dec. 1934)

次の四種の發表がある *Duthiella formosana* NOG., *Duthiella robusta* NOG., *Calyptothecium pinnatum* NOG., *Himantocladium speciosum* NOG. 何れも同氏の台灣各地よりの多數の標本により研究されたものである。精しい圖解は非常に嬉しい事である。

**デクソン氏**：——**滿洲産蘚類** (H. N. DIXON:——Manchurian mosses. in Rev. Bryol. Tome VII, Fasc. 1-2, p. 105-116, 1934.)

M. KOBAYASHI, N. IWASAKI 兩氏の採品を笹岡久彦氏が DIXON 氏に研究依頼されたものの發表である。71種が同定され、新種14 (内一種は本田正次氏の熱河での採品)、新變種1、新組合1がふくまれてゐる。(外山禮三)

## 雜 報

### ハコネコメツ、ジ屬 (*Tsusiophyllum*)

豆南諸島、伊豆半島、駿河、甲斐の地方は相合して一の植物區系圏を成すものなるは種々の特産によりて知らるゝが其最顯著なる代表者は實にハコネコメツ、ジ屬であつた。然るに本屬は遂に南北日本の境界を西に越して飛驒國にあらはるゝ事を發見して此に大なる失望を感じた。(G. KOIZUMI)

### 植物地理學より見る “日本帝國”

日本の植物分類學者は、よく、The Empire of Japan に於ける何々植物とか、又は Imperium Japonicum に於ける何々屬とか申さるゝが、元來政治區劃は植物地理上の單元ではないから、もう少し植物地理的に云ひ表はされた方が地文學的である。